

§ 8. さいごに

最終報告書は、ご覧頂きましたように盛り沢山の内容となりました。今回「§3.歴史的鋼橋を訪ねて」で取り上げた、永代橋、清洲橋、そして豊海橋などについては、すでに多数の出版物でも紹介されており内容的には決して目新しいものではありません。しかし、永代橋のタイ材、清洲橋の架設ヒンジ、フィーレンデールの解析方法などに触れているものは少なく、橋梁エンジニアならではの視点でできるだけ違った角度から紹介したつもりです。このような歴史的鋼橋に関する調査は、時間と労力を費やせば必ずそれに見合った成果が得られるといった性質のものではありませんが、今回は前報告書から約5年のインターバルを経た分、内容的にかなり充実させることができたと思います。また、本報告書で取り上げた橋梁のうちすでに撤去されてしまった橋が3橋ありますが、撤去工事が具体的に動き出してから初めて貴重な資料や写真が見つかるケースが多いのも皮肉なものです。

「§4.リベット橋ができるまで」の章末にも述べましたように、今後、我々若いエンジニアがリベット橋と付き合う機会は増えると思われます。また、ライフサイクルコストを論じる前に、すでに100年近くの年月を経た橋梁に接することから得るものは決して少なくないはずで。その際に、本報告書が何らかのかたちで役に立てば幸いです。

最後に、本報告書をまとめるにあたり資料提供、ご協力を頂いた下記の各位・各機関に感謝の意を表します：日本大学教授 伊東 孝氏、中央区土木部 滝澤幸一郎氏、鉄建・佐藤JV 三田作業所、松尾橋梁(株) 鷹羽新二氏、木下 潔氏。

平成 15 年 (2003) 3 月

鋼橋の技術史研究部会
幹事長 掘井 滋則



H15年2月21日 最終部会にて

[前列左より掘井、小西、藤井、後列左より山田、稲村、川崎、大岩]